

最優秀賞

弓道を通して学んだこと

ながおか
長岡 亜佐実

大和郡山市立郡山東中学校二年（奈良県）

この八月で、私が弓道を始めてから二年と十ヶ月がたつ。始めたころはゴム弓（初心者のための弦の部分がゴムになっている小さい弓）しか引かせてもらえず、あまり楽しくなかった。しかし、気がつくと週に三回も道場に通っていた。自分でも驚くほどである。今までは書道やそろばんを習っていたが、どちらもなんとなく通っているという感じだった。でも、弓道は毎回行くのが楽しみだし、テスト勉強のために休んでいると落ち着かない感じがする。こんなに弓道に夢中になるとは思ってもいなかった。

私は弓道を始めて、根気よく努力する力が身についたと思う。いつもの私は勉強でもスポーツでも少しは頑張るのだけれど、これ以上無理だと思うとそこであきらめていた。しかし弓道では、できないということが悔しいと思うようになった。例えば、手の内（弓を持つ手の形）である。私はよく親指が曲がったり、手首が負けてしまったりする。なぜできないのか。また、それを直すにはどのようなすればよいのか。先生や会員の方々に尋ねたり、教えていただいたりする。でも、なぜできないのか、直すにはどうすればよいのかはつきり分かってできないことがある。そうになると、たくさん弓を引くしかない。全然できないとき、私は考え方を変えて、でき

ないということはまだそれだけ伸びしろがあるということだと考えるようにしている。

そして、地道に弓を引いていると、ある日、

「今、できたんちゃうかな。」

と思うときがある。でも、できたと思って次の練習に行くと、またダメなときの形に戻っていることがある。しかし最近、このできる、できないを繰り返し、やっと手の内がましになってきた。まだ「ましになった」という程度だが、私にとっては大きな進歩である。

私は弓道を通して「できないことができるようになる」という喜びを知ることができた。

弓道を始めて日が浅い私だが、弓道は精神面が大きく左右する競技だと思う。私の射技はもちろん、半人前の半分にも達していないが、精神面では本当にまだまだだと思う。それを身をもって感じたのは、今年の市民体育大会のことだった。私はふだんからあまり的中しない方なので、的に中ることは考えておらず、大会の雰囲気慣れようと思って出場していた。しかし、その考え方がよかったのかすごく集中して弓を引くことができた。その結果、四射中二本以上の的中で決勝に進めるのだが、私は四射中三中で決勝に進むことができた。このときは、喜びより驚きの方が勝っていたように思う。

そして、いざ決勝。入場するときは予選での落ち付きが嘘のように緊張し、体がゆらゆら動いているような気分がした。私は最後の射手だった。緊張しながら待っていると最初の射手の弦音（矢が弓から離れるときに出る音）の後に、

「タンッ。」

という、的に矢が中る音がした。二番、三番の人のときも同じ音が聞こえてきた。目は正面を向いているので的の方は見えないが、音は嫌でも耳に入ってくる。しかし、他の人は関係ない、集中しないのと、心の中で自分に言いしかせた。そして、いよいよ私の番である。矢を番え、打起し（弓を高く上げる）、大三（矢の半分くらいの長さを引く）。緊張はピークである。両足が地面から浮いているように感じた。そして引分け（矢が口のあたりにくるまでたっぷり引く）。力が入ってしまい引きが小さく、会（引分けた形のまま静止している状態）も短くて気付くと安土（的の後ろの土）に刺さった矢が目にとびこんできた。的にとらわれ、集中して弓を引くことができなかつた自分がとても恥ずかしく思えた。緊張していないから集中できるのではなく、集中しているから緊張しないのではないかと私は思った。私は集中しきれていなかったのだ。結果は四位だったが、もしあのとき的中していたらきつと学べなかつただろう大切なことを的中しなかつたことで学べたと思う。

私が今まで弓道を通して学んだこと、これからも弓道を続けていくなかで学ぶことは弓道はもちろん、私が生きていくうえでも大いに役に立つでしょう。私はその学んだことを大切にし、後悔のない、矢のようにまっすぐな人生を送りたい。私は弓道に出会い、弓を引くことができて本当によかった。